

僕と自転車の6日間戦争

私の人生は余暇で埋め尽くされているといっても過言ではない。数ある余暇の中でも、ここで紹介したいのは2017年のゴールデンウィークで体験したものである。その体験というものは宇都宮からわが故郷である鳥取県米子市まで自転車で帰省を行ったことである。宇都宮から米子まで距離にして931km、日数にして6日間の闘いであった。

輪行バッグ、タイヤチューブの購入など万全の準備をして当日の朝を迎えた。関東平野という言葉があるように当初は思いのほかすいすい進んだ。そんなこんなで私は1日目の目標としていた茅ヶ崎(神奈川)に到着した。その日の宿は足を伸ばすのがやつの所謂ネカフェに決めた。価格重視である。2日目は鬼門、箱根・熱海越えが待っていた。そこでは急激な登りが多く、途中自転車を引く場面がいくつかあった。登りを繰り返していた私にその疲れを癒してくれる存在が現れた。富士山だ。横を見れば世界遺産富士山があるという状況は私の心を鼓舞した。気が付くと、私は島田(静岡)に着いたが、あたりは真っ暗になっていた。そこで2日目の宿探しをすることとなったが、ここで行き当たりばったりで旅をしていた付けが回ってきた。いくら探しても安価で泊まれるところが見つからないのだ。途方に暮れていた私はとある公園に行きついた。牧之原公園である。その日の宿が決まった。万が一に備えてテントを持ってきた甲斐があった。野宿である。テントで寝ようとしていると、そわそわと話し声が聞こえてきた。後日調べてみると、牧之原公園は夜景が有名でその夜景を目当てに多くのカップルが訪れていた。カップルの語らいを子守歌に私は眠りについた。3日目の朝、野宿の洗礼を受けた私は風邪をひいた。また、3日目にしてとある企画を行うことにした。ご当地グルメ企画だ。記念すべき第1回は浜松餃子に決定した。宇都宮市で生活するものとして、浜松餃子がなんぼのもんじやいという心もちで暖簾をくぐったが、絶品であった。その日は刈谷(愛知)まで行ったところで歩みを止めた。前日の教訓を活かして泊まれるところで泊まろうということである。3日目の宿は人生2回目のネカフェに決めた。夜ご飯はご当地グルメ企画第2回として、味噌かつ丼を食した。美味であった。4日目の四日市(三重)に差し掛かったところで、事件が起きる。自転車がパンクしたのだ。ただ、この行程中にパンクすることは想定済みでそのためにタイヤチューブも購入していた。しかしここで重大なミスに気が付いた。空気入れを持ってきていなかったのだ。肩を落とした私は近くの自転車屋へ向かった。自転車の修理に時間を取られたこともあり、4日目は最短の120kmで終わり、風邪をひいていたこともあり伊賀(三重)のビジネスホテルに泊まることにした。5日目の昼に大阪でたこ焼き、兵庫で明石焼きを食べ、姫路(兵庫)のネカフェに宿泊した。3回目ともなればネカフェに泊まるのも慣れたものである。迎えた6日目、岡山でデミグラスかつ丼なるものがあると聞きつけそれを昼ご飯に決めた。しかし、思いのほか早く着きすぎ、どの店も開いていなかった。開店まで待つのも時間もったいないため、私は渋々デミグラスかつ丼を諦め、旅を進めた。岡山から鳥取にかけては中国山脈と呼ばれる山地帯が続いているため、どうしてもその日のうちにゴールしたかった私は6日目にして最長の217kmもの距離を進み、見事目的地である我が家に到達した。

この旅で私が得たものは何事にも屈しない忍耐力、ネカフェに泊まる度に作らされた会員証といったものだろうか。実家に自転車を置いてきたため、復路が待っている。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出16本のうちの後半8本!!

たまには沖縄旅行でも

暇ができたら何をして過ごす。答えは、「ひたすら寝るに限る」。そんな圧倒的なインドア派の私だが時には、外に遊びに行こうか、なんてときもある。いわゆる、「非日常」体験を欲しているのかもしれない。2015年の夏には沖縄に行った。

沖縄には小学校3年生の夏に、家族旅行で連れて行ってもらい、その後数度訪れていた。初めての沖縄の、前日の夜は楽しみすぎて午前3時まで眠れなかった。また、初めて訪れたときには透き通っていた海が、数年後に訪れたときには濁っていたことが忘れられない。その後長男である私が中学へ上がり部活動が始まり、それ以来家族で沖縄へ行くことはなかった。高校の修学旅行にて久々沖縄を訪れるが、男子校の沖縄旅行などお察しである。

本質的に面倒くさがり屋の私にとっては、飛行機の予約も、ホテルの予約も、レンタカーの予約も、大変な重労働である。しかしここは父親譲りか、一度計画を立てると楽しくなってくる。旅行の醍醐味は計画段階にもあると言える。結果的に、LCCを予約、最安値のレンタカー会社を探し、様々なレジャー施設をお得に入場できるチケットを購入し、細かいスケジュールを旅のしおりに印刷して準備した。ここで一番面白かったことは、飛行機代節約のために、成田発着LCCの行きは早朝便、帰りは深夜便にしたところ、それらの時間に間に合う宇都宮から、また宇都宮までの交通機関がなかったために、成田空港近辺で出発前、到着後に宿泊したことである。結局高くついているのだ。

様々な観光地を回ったが、特に印象に残っているのは古宇利島である。古宇利島へ向かう橋から見る海の眺めは、私のベストオブ海である。左右に広がるのはエメラルドグリーンの広い海、前方にまっすぐに伸びた橋、まるで海の上を車で走っているかのような気分、運転免許証を持っていて良かったと、このとき強く思う。眺めはきれいだが、橋上を歩いている観光客もたくさんいるため、わき見運転には注意である。海なし県、群馬に生まれた私にとって、ダム以上の大きな水を見たらテンション上がりにはいられない。それはいくつになっても同じなのである。

16時58分、私たちは閉園間際の名護パイナップルパークから出てきた。パイナップルおいしかったねと、帰る準備をしているところ、大勢の従業員が続々と出てくるではないか。お客は完全に全員帰ったのかわからない。私たち以外にも駐車場には何台かの観光客の車は停まっている。しかし、17時には退社なのだ。ここに沖縄の県民性を垣間見たような気がした。名護パイナップルパークで働きたいと思った。

泊まった宿は北部の小さな村の、海の近くのゲストハウスであった。オーナーさんは北海道出身であり、移住定住、エコツーリズム開発、様々なキーワードを想起させた。沖縄には多くの移住者がいるというが、なぜ人々は沖縄に惹かれるのか。おそらく、あたたかく過ごしやすいからである。戦争、基地、地域活性、地域社会など様々な社会問題について考えさせる側面も持っている沖縄は、それもまた魅力的である。

旅行は、たまには良い。準備への労力も含めて、年に2回くらいで良い。お金もかかるしね。今年はどこへ行こうかな。自転車で遠出もしたいし、海外も行きたいし、また沖縄も行きたい。どんな夏を過ごそう。そんな夢にふけりながら、1日中部屋でゴロゴロしているいつもの通りの日曜日に重い筆を執るのだった。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出16本のうちの後半8本!!

私のはじめての「異文化コミュニケーション」

「今日から新しい友達が着ました。さあ、入って。」先生が、ドアの方へ向かって手招きする。期待でワクワクしながら待っても、いっこうに入ってくる気配がない。先生は、ドアの外まで行って一緒に入ってくると、私たちは、びっくりして声も出なかった。先生に連れられて入ってきた少年の髪は金色で、目は青く透き通っていた。これは、私が小学校5年生の時の出来事である。今思えば、先生の手招きは日本式で、その少年は理解できなかつたろう。少年は、一生懸命覚えてきた日本語で、「僕の名前はジョン・クロウです。アメリカから来ました。」と言った。それから、年配の担任の先生が英語で話しかけたが通じず、黒板に書いてコミュニケーションしていた。授業は、算数だけはスムーズにいったが、その他は先生も生徒も手探りで、わずかな単語とジェスチャーだけで、毎日が過ぎていった。

ここから、本題の余暇であるが、そのころ私達は、昼休みには、ルールは野球だがバットの代わりにボールを腕で撃つ遊びをしていて、そのジョン君も一緒に遊び始めた。また、放課後は、鬼ごっこをしたり、ドッチボールをしたりして、徐々にジョン君も私達と仲良く遊べるようになっていった。

しかし、すべてが、スムーズにいったわけではなく、ほとんどジェスチャーからはじめてので、お互いの意思の疎通を図りコミュニケーションをするということは衝突も、もちろんあった。中でも、私達日本人の子どもたちが大きく反省したのは、ジョン君が何かをやろうとするとき、すぐに「ジョン君ダメ!」と大きな声で制止してしまったことである。私達からすると、昼休みや放課後になると、いつも遊ぶメンバーが決まっていたり当然のように集まって、自然と遊びだしていたし、日本人の転校生が来ても、一度誘ったら、たぶん転校生が気配を察して私たちに溶け込んでいたのだと思う。しかし、ジョン君は、あまりにも勝手が違いすぎた。日本人特有の、話さなくても通じるは、通用しなかったのである。そして、それになれていない私達は、違うことをやろうとするジョン君を制止してしまったのである。

彼にとっては、余程ストレスになったのだろう。そのうちに、怒ったように「ジョン、何ダメ?」と聞き返してきて、私は今でも彼のその時の表情が忘れられない。しかし、そこで私達日本人の子どもたちは、ジョン君の戸惑いに気づいて、「ダメ」という言葉を使うのをやめようと話し合って決めた。そして、私たちは、今までのやり方をやってみせたり、ジョン君がやるのをみてルールを変えたりした。また、彼が言う英単語や短い文を真似して、少しずつ英語を憶えていった。彼も、同じように日本語を覚えていった。

これが、私にとっての人生初の「異文化コミュニケーション」であった。小学校を卒業し中学校でも私は外国人の隣のクラスの女の子と友達になった。その後も色々な出会いがあったが、私が文化の違う人とコミュニケーションするときに気をつけていることは、この経験から自分の価値観で相手を否定しないことである。私が、このことを強く意識するようになったのは、この小学校で経験したジョン君との思い出があればこそで、私にとって、大切な思い出である。ジェスチャーがとても大きかったこと、大きな声で笑っていたこと、脚が長くて歩くのが早かったこと、青い瞳でじっと相手の目を見て話していたこと、小学生の私にはびっくりすることばかりだったが、今となってはとても貴重な経験だったと思っている。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出16本のうちの後半8本!!

土曜日は朝から～僕と友達、ときどきオカン～

金曜の夜、母は言う。明日は暇ですか。僕が言う。いいえ。

午前8時、私の目覚ましの音楽、Bruno Marsが歌う「The Lazy Song」が大音量で部屋中に鳴り響く。軽やかなメロディーと共に、「Today I don't feel like doing anything. I just wanna lay in my bed.」起きるのはまだ止めておこう。そう決心する土曜日の朝。気づけばアラームが1曲分終わってしまう。そろそろ起きるか。

午前9時、朝の日課のブラックコーヒーを飲む。休日の朝は時間がある。のんびりとハンドドリップで作ったものを飲みながら前日に録画した、お昼時にやっている海外ドラマを観る。英語音声、日本語字幕、この設定は欠かせない。ここで私の余暇が幕を開けた。

午前10時、お気に入りの運動着をまとい、ランニングに行く。最近飲み会が多いせいか、下腹が気になるのだ。「40代まで太らない」という人生の中の大きな目標の1つを20代の初めで諦めるわけにはいかない。30分程度走ると体が温まってきたのがわかる。ここですかさずいつもの公園で筋力トレーニングを行う。それによって、ランニングによる脂肪燃焼と筋肉の増加の相乗効果を発揮し、締まりのある体へと進化を遂げる。しかし今日は先客がいるようだ。ふーむ、ゲートボールか、奥が深そうだ。今日は彼らに譲るとするか。クールダウンも兼ねて帰路へつく。

午前11時30分、シャワーも浴び終え、お昼ごはんの冷凍パスタを食べる。冷凍パスタは奥が深い。電子レンジの質ですべてが決まる。

午後1時、昼寝をする。ぬいぐるみが枕にちょうど良い。

午後3時、明日のアルバイトは17時からのシフト。今日の夜はアルコールに浸ろう。そう決心した私はすかさずスマートフォンを手に取る。そしてLINEの国際学部男子サッカー部のグループで一言。「Alcohol Day」と。

午後6時、飲み会に備えて納豆ご飯を食べる。絶妙な味だ。

午後8時、そろそろと皆が集まり、肅々と乾杯が行われたかと思いきや、2時間も経てばみんなで歌い出す。今日はペースが早い。ウイスキーなどという恐ろしい飲み物を開発した人を恨む。笑顔と熱気に溢れたこの時間、どうか隣人に怒られませんかように。

午前3時、飲み疲れた男達はゆっくりと眠りにつく。起きたとき、朝に観た海外ドラマの事件現場の再現になっていないことを祈ろう。もしそうなったときの犯人は間違いなく、酔うとスペイン語と英語を話し出す彼の仕業だろう。こうして、私の余暇は気分が優れないまま幕を下ろしたのであった。

私にとって余暇とは、自分と向き合うことのできる時間である。何も予定のない休日というのはこれに適した時間であり、さらに、何気ない日常に意味を持たせてくれる貴重な時間でもある。余暇があるからこそ、どんなに忙しい日々があったとしても自分の軸を常に一定の位置に置いておくことができる。余暇の重要性は、今後社会に出て働くときにますます大きくなっていくことだろう。私は余暇を活かせる人間でありたい。余暇、なんとも奥が深い。

「心に残った私の余暇経験—オンリーワンのエッセイ—」 選出16本のうちの後半8本!!

海外研修の経験とこれから

私の心に残った余暇経験は、高校1年生の夏休みに行った2週間の海外研修という名の海外遠足である。ここで海外遠足と言い換えたのには訳があるが、それについては後から述べるとする。この研修の主な目的は、私が通っていた高校と提携を結んでいたオーストラリアの高校に行き、そこに通う学生の家ホームステイし、英語力を伸ばそう、また、海外のリアルな生活に入り、異文化体験をしようというものであった。私にとってはこれが初めての海外であった。

この海外研修は毎年何人かの生徒が参加していたが、私が参加した年は例年に比べても多く、20人以上の生徒が集まった。参加生徒を絞るために試験を行ったが、結局ほとんど人数は変わらなかった。そのため、ホームステイを受け入れる家庭と参加生徒の数の比率が合わず、ほとんどのホームステイ先に2人か3人の日本人が入ることになった。私は先輩と2人で同じホストファミリーにお世話になることになった。まず、オーストラリアに着いた初日は、現地の高校に行き、そこに迎えに来ていたホストファミリーの車に乗り、家に行った。なかなか車の中で英語が出てこなく、話が続かなかったのを覚えている。家は日本でなかなか見ない形で、最初からカルチャーショックの連続であった。2日目は、他の生徒のホストファミリーも集まり、近くの動物園に行った。ホストファミリーとまだあまり仲良くななく、同じ高校の日本人が20人近くいるということで、やはり日本人がかたまり、全く英語を話さない。その次の日から、現地の学校に行くことになるが、やはり日本人がかたまる。そして英語を話さない。家に帰っても、勇気が出ずなかなか話せない。また、先輩がいるため、そちらに日程の確認などをしてしまう。何日間か学校に通うが、現地の高校生とうまくコミュニケーションが取れない。休日には海に行き、ペンギン観察や水族館などの観光をしたが、ここでも日本人と行動を共にしたため、英語より日本語を話していたと思う。とてももったいないことだが、これが2週間は続いたのだった。しかし、最初に述べたように、この海外研修は私にとって初めての海外であったため、何もかもが新鮮で、英語を話す話さないの前に「海外に来た」という事実を素晴らしく感じていた。そのため、高校生の頃の私はこれが自分の知る「海外研修」であったし、自分はとても良い経験をしたと思っていた。

このような経験を経て、私は今この大学にいる。大学に入るまでは、質はどうかあれ自分は海外に行ったことがある、ホームステイをしたことがあるということが自分の大きな自信になっていた。しかし、大学に入学し周囲の人々の経験を聞き、私の高校生の時の「海外研修」は、ただの「海外遠足」に過ぎないものになってしまった。もちろんこの海外遠足が無駄のものであったとは言わない。このおかげで、次は遠足や旅行ではなく、長期の滞在で、目的を明確に持ち、より自分のためになり、将来に生かせる経験を得たいというリベンジの活力につながっている。この余暇経験は、「海外研修」であると思っていた時の思い出、またそれが「海外遠足」になってしまったという思い出、次は遠足ではなくより充実したものにして考えている今、という3つの点から、私にとって忘れることのできないものになっている。

味と記憶

「味」というのは、単に味覚に伝わってそのものの特性や状態を示すだけではなく、個人の記憶を保存しておき、呼び覚ます機能があると思う。何か料理や食べ物を食べたときに、そのものに関わるエピソードや記憶がふと浮かんで来たことはないだろうか。例えば、実家から離れて一人暮らしをしているとき、地元でよく食べていたものを食べると、両親や地元の友達のことを思い出したり、ワインを飲んで、レストランでのアルバイト中につまづいて客にワインをかけてしまい怒られた苦い失敗を思い出したりなどだ。ここで、私の例を二つ紹介したいと思う。

「シュクセ」は、宇都宮中央公園の近くにある洋菓子店コボリの人気商品である。ナッツとチョコレートを混ぜたケーキに、さらにチョコレートとナッツがコーティングしてある手ごろなサイズの焼き菓子だ。甘すぎず、ナッツとケーキのザクザクした食感とコーティングチョコレートのパリッとした食感が同時に楽しめる。これを、去年の3月末に母と買いに行った。山形の田舎から出てきて一人暮らしを始める私を心配して、母は私の新居であるアパートに泊ったのだ。母が山形へ帰る日の朝、私と母は今生の別れであるかのように号泣した。なんとか泣き止んで二人でコボリ洋菓子店に行き、母と駅で別れ、私はひとりバスに乗って、泣くまいと「シュクセ」を握りしめアパートに帰ったのだ。そしてその日の夕食後に、「シュクセ」を食べると私は母を思い出して泣いた。今思うと、一人暮らし初日からホームシックだったのだと冷静に考えられるが、「シュクセ」を食べるとあの時の寂しかった気持ちと、一連のエピソードを思い出すのだ。

次に、みかんによって思い出される私の記憶を紹介したい。曾祖父は、訪ねるたび必ず私と姉にひとつずつ、みかんをくれた。みかんは曾祖父の好物で、曾祖父の部屋には箱でみかんが置いてあったのだ。彼はほとんど寝たきりで、ひどく痩せていて、祖母に介護されていた。まだ小さかった私にとって、異質な存在であり、正直、会うのが苦手だった。曾祖父について、私は知っていることがほとんど無い。生前の彼についての私の記憶は、やはり部屋に箱でみかんが置いてあって、そしてそれをいつもくれて、亡くなる直前、病室で手を握った（自発的ではなく、母に言われてそうした）ということだけだ。後に母から、曾祖父は山に非常に詳しく、太平洋戦争時に実際に戦場には行かなかったが満州へ行き、二度目の出国の直前に終戦令が出たため、捕虜にならず生き延びたことを聞いた。こうして聞くと、なかなか劇的な人生を送ってきたのだな、と思う。しかし私の単純な記憶からすると、曾祖父は私にとって「みかんの人」なのである。曾祖父のことはほとんど知らないが、「曾祖父と言え、みかん」という記憶が何故かそれだけ強烈に残っているのだ。

味によって記憶が蘇るといふ、私が述べた二つのようなエピソードは、なかなか思いつこうと思っても思い浮かばない。なぜなら、このような記憶は普段は頭の隅や影にいて、味に刺激されないとなかなか出てこないからだ。だから、無理に記憶を呼び起こそうとするのではなく、何かの味によってふと思い出した瞬間、その思い出を再びたどってみたり、誰かと共有したりして、大事にしていければよいと思う。

私の心に残った余暇の体験は、キャンプに行っていたことである。小学校のころ、父、母、弟の4人家族で山形県酒田市にあるキャンプ場に夏になると毎週行っていた。そのキャンプ場は広大な敷地があり、そこにテントを建てるようになっていて、またコテージが5棟くらいあり、いつも予約でいっぱいだった。毎週金曜日の夜に家を出て、日曜日に帰るという2泊3日のキャンプだった。キャンプ場に着くと、まず自分たちのテントを建てるところから始める。テントを建てる場所が決まると、家族で協力して荷物を車から降ろす。その後、テントを建て始める。いつもキャンプ場に到着するのが夜で暗いため、明かりを灯しながらテントを建てるのはとても大変だった記憶がある。テントのほかにタープを建て、30分から1時間くらいで建てた。テントが完成すると、BBQの準備をする。父と弟がBBQ用のコンロで火を起こして、その間に母と私が食材の準備をする。準備が終わると肉や野菜を焼き始める。BBQが終わると、近くに隣接する温泉施設に行く。その温泉施設は、3種類ほどの温泉とサウナがあり、内装もきれいだっただ。私たち家族は気に入っていていつも利用していた。お風呂の後はいつも疲れているためすぐ眠ってしまっていた。

二日目はいつも朝早く起きてしまっていた。おそらくこのキャンプが楽しくて早く起きてしまったのだろう。いつも両親よりも早く起きてしまっていたため、いつも1人で広大なキャンプ場の敷地内を30分くらいかけて散歩していた。散歩していると色んな人たちがキャンプをしていて早朝にも関わらず、起きて家族で話している人が見受けられた。その人たちを見ながら散歩するのが私の密かな楽しみだった。散歩から帰る頃に両親は起きていて、母と一緒に朝食を作りみんなで食べた。朝食のあとは少し休んでから海に行く。歩いて5分ほどしたところにある海水浴場は多くの人たちで賑わっており、場所を確保するのも一苦労だった。海では、父と弟の3人で遊んで母は砂浜で見守っていた。海で遊び終わると温泉に行き、夕食の準備をした。海で遊んだため、その日も早く寝てしまった。

最終日も2日目と同様に朝起きてから散歩して朝食を食べてキャンプ場内で弟とバトミントンや鬼ごっこなどをしていつも遊んだ。また、母が昼食を作っていたのでその手伝いをしていた。昼食後はテントを片付けて家路についた。

私は小学校に家族とキャンプをした経験から、日常とは離れた環境に触れることで、家族との仲を深めるきっかけになると考えた。日常とは離れた環境の中にいることで、家族が協力する機会がいつもより増える。その中でも、キャンプは家族が協力する場面が特に多いと感じる。テントやタープを建てたり、料理をしたり、洗濯をしたりなど家族が協力しなければならない場面が多い。そこで協力して作業することが家族や仲間との関係を深める良いきっかけになると考える。この協力が有ることで、家族や友人との動作の呼吸があってくる。この動作の呼吸が合うということは、相手が今何をしてほしいかがわかるということである。これは、相手の考えがわかるということにもつながってくる。このように協力する機会が増えるということで、家族間や友人などの仲間の間の関係は良好に築くことが出来る。私は、小学校の頃にキャンプに行ったことで家族の仲がさらに深まったことに関係あると考える。よって、この経験から日常とは離れた環境に触れることは、家族や仲間との関係を良好に築くためのきっかけになると考える。

癒しの存在

私にとっての「余暇」は愛犬と過ごす時間である。初めて彼と出会ったのは私が14歳(中学2年生)の時だった。ずっとペットが欲しかった私は日々その思いを訴え続け、親に「見に行くだけよ。」と言わせるまで説得することができた。そして出会ったのが「ショコラ」である。あんなに反対していた母が、彼を見た瞬間に飼うことを即決したのだ。その日突然私たちは飼い主となった。連れて帰ったとき、何も伝えていなかった兄はとても驚いていたのを覚えている。

そんな出会いから7年が経ち、私たちの生活の中心はショコラになっている。性格は全く忠実ではなく、どちらかという猫に似ている。いたずら好きで、油断していると何でも食べようとする。それを取り返そうとすると、普段はかわいい顔が一変、鬼の形相になり遠慮なしに攻撃をしてくる。また、とても気まぐれで抱っこしてほしいときはおねだりがしつこく、そうではないときは激怒する。しかしそんな性格の彼は、間違いなく私たち家族のつながりの糸となり会話を生み、癒しを与えている。彼と会う前、不仲の兄妹と話しかけても反応の薄い母、しつこい父という4人家族はまるで同じ空間に閉じ込められた他人のように会話が少なかった。それが、1匹の犬がその空間に追加された途端に、私たちの間には様々な会話が生まれた。初めて育てるペットのためにどんな行動が正しいのか、ご飯の種類や量は何が適しているのかなど、ショコラについての話題は家族全員で共有した。それだけではなく、私たち兄妹の学校での出来事や部活動の話も盛り上がるようになった。反対に、ショコラ育て方の方針のすれ違いで喧嘩することもあったが以前より家族らしくなった気がする。それに、笑顔も増えただろう。私の個人的な変化としては、家で過ごす時間が好きになった。家族と会話をするようになってから、親への感謝の気持ちや存在の大切さにも気づいたのだ。

生きていると心が傷つくことや、落ち込むことがある。そんな時、ショコラを見ると癒される。彼はとても自由だ。動物は人間の心が読めるという話を聞いたことがある。もしかしたらそれは真実かもしれない。だがたとえそうだとすると、きっとショコラに関しては例外だろう。彼はどんなに私が悩んでいても、悲しんでいても、いつも通り偉そうに、わがままに接してくる。私はそんなショコラを見てイラつくのではなく、自分の悩みはちっぽけなことなのかもしれないと前向きになり、元気をもらえる。人間に対して悩みを打ち明けることが得意ではない私にとって、彼の存在は大きい。

ショコラは私たちに大切なことを気づかせてくれたうえに、日々元気や癒しを与えてくれる。大きな事件が起こらない限り、彼の命は私たち人間のそれよりも期限が短い。まだ時間はあるが、ふと彼がいなくなった後のことを考えてしまう。彼が私たち家族に中心にいる今の生活。中心がなくなってしまう悲しさは想像するだけでも悲しいものだ。そう思いながら、私はショコラの存在の大きさを再確認し、感謝し、大切に思いながら彼の背中を撫でる。残りの時間で、彼から与えられたもの以上の幸せを返してあげたいと思う。私にとっての「余暇」とは愛犬と過ごす時間である。その「余暇」は、私に癒しだけでなく命の儚さ、家族の大切さを教えてくれる。